

神戸ユニオンプロテスタント代表役員 田淵 結牧師

神戸ユニオン教会は、ちょうど150年前の1871年に本格的な教会組織が整い、伝道活動をスタートさせました。最初の教会建物は居留地、現在の神戸大丸のすぐ近くにあり、1929年に二宮町（現在のフロインドリーフ）に移転、さらに現在の地にと、何やら海岸から街の中心、そしてヒルサイドへと移りましたが、現在の教会からは神戸市街地を眺めながら、改めて私たちの教会の足跡をもたどることができます。この教会は最初訪日、在日の外国人のための教会でしたが、そのときから今日に至るまで会堂のなかにはたくさんの言語がとびかかっていました。英語、ドイツ語、日本語以外に、たくさんの諸外国から多くの人々がここに集い、祈りを捧げられました。確かにお互いの言葉はすぐに通じるということはむづかしかったのですが、しかしその言葉の壁を、私たちは音楽によってクリアすることができました。クリスチャンはシンギング・ピープルとよく言われます。さらに音楽はユニバーサルランゲージでもあります。今日こうして教会の音楽を支え続けてきたパイプオルガンの響きに包まれながら、私たちの教会がこの音楽によって、さまざまな人がひとしく、ともに豊かな時を過ごしてこられた歴史を振り返るひと時がもてることを願っております。。Solo Deo Gloria!

ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪 アンドレアス・ルスターホルツ牧師

ご来場の皆様、ようこそお越しくださいました。

神戸ユニオン教会（KUC）の150周年と日独公式交流160周年を記念する富田一樹さんのオルガンコンサートをここに開催いたします。

斎藤元彦知事の代理として兵庫県国際局長の横川太様、在大阪英国総領事のキャロライン・デビッドソン様、学校法人関西学院理事長の村上一平様、神戸松蔭女子学院大学学長の待田昌二様に、ご臨席を賜りまして、光栄に存じます。残念ながら、ご来場の皆様を全員紹介することはできませんが、ここに感謝の意を表します。

神戸ユニオン教会が150年前に設立された際、創立者のうちにはドイツ人もいました。英語圏の"同胞"からの資金提供と、アメリカ人宣教師が手配したアメリカの諸教会からの寄付がなければ、神戸ユニオン教会は大きく成長し、長く続くことはなかったでしょう。私たち、神戸ユニオン教会とEKK（ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪）は、今日でもこの恩恵を受けています。

受け取った厚意は、さらに他者へとつなげなければなりません。阪神・淡路大震災、そして東日本大震災の際、神戸ユニオン教会が被災者への支援に尽力したことによって、私たち励まされ、微力なが

ら支援活動を開始しました。このコンサートは、EKK から神戸ユニオン教会への感謝でもあります。

ここで、教会の歴史をすべて語るには時間が足りませんので、ご興味のある方には、EKK（ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪）の歴史に関するビデオを紹介したいと思います。EKK のホームページにはドイツ語版、日本語版、英語版があります。時間がございましたら、是非、ご覧いただきと思います。

ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪は、以前に比べてメンバーの数がかなり少なくなりましたが、礼拝の他にヨーロッパのドイツ語圏の人々やドイツ語を話す日本人との交わりの場を提供しています。また、関西に一時的に滞在している研究者、実習生などのための居場所にもなっています。このように私たちの教会は、小さいものではありますが、その大きさからは想像できないほど重要な存在です。これらはすべて、神が据えられた土台があってこそ、可能たらしめているのです。

ドイツ連邦共和国総領事 マルティン・エバーツ

ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪 150 周年に際する祝辞

信者の皆様、ご来場の皆様、

ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪の創立 150 周年に際し、ドイツ連邦共和国を代表して心よりお祝い申し上げます。大阪・神戸ドイツ総領事館の管轄地内には、日独関係においてこれほど素晴らしい伝統を持つ機関は他にありません。神戸における皆様の存在は、波乱に満ちた歴史を通じて続く両国民の結びつきを如実に示すものであります。

今年ちょうど日独交流 160 周年の公式記念行事も行われていることは、幸運な偶然という以上の意味があります。この 160 年の間には関係が良い時も悪い時もありました。また、激動に満ちた困難な時代もありました。しかし、日独関係においては常に両国を結び付ける「赤い糸」とも呼べる何かが存在していました。お互いに対する深い理解、相手国が成し遂げてきた成果や文化に対する敬意、相互への真摯で深い共感です。

ドイツ人と日本人は、伝統や文化的表現は大いに異なるものの、昔から何度も主張されてきた通り、よく似ているのかも知れません。私は言葉の選び方に気を配りつつも両国民の間の「親和力」について語るのが好きです。ここでいう親和性は、他者の中に見出す自分との類似点であると同時に、その反対、すなわち他の文化に対して常に新たな興味をかきたてる相違点でもあるのです。

これはあまりに哲学的で抽象的だと思われる方もあるかもしれませんが。しかしこの「親和力」のイメージは、ドイツ人が日本や日本文化について語るときに持つ特別な尊崇の念をととも上手く表現しており、また私達ドイツ人もその逆を日本で経験しています。160 年にわたる両国関係を振り返ると、

互いを特別なものとして尊ぶ日独間の友情が様々な形で体現されていることが分かります。

今日この特別な性質が特に顕著に現れているのが、文化、学術、経済、先端技術、美術、文学、音楽などにおける、交流の驚くべき幅広さです。さらに過去 70 年は共通の基本的価値観と基本的な政治的信条によって深いつながりが形成され、特に自由と民主主義と人権を守ろうとする時、日独は国際的な舞台において固く結ばれた盟友となりました。この価値観の共同体を雄弁に物語るのが、ドイツ連邦政府の新たなインド太平洋戦略です。ドイツは日本を当然のごとく政策の拠点とし、この地域において中心的な役割を果たす存在とみなしています。

このように、祝うべき事柄はたくさんあります。コロナ禍のため、記念行事の多くは思うような形で開催することができず、行事によっては完全に中止せざるを得ませんでした。私が本日極めて遺憾ながら記念コンサートに出席できないのもコロナ禍のためです。ドイツからの帰国後、規定に従って自主隔離をしています。

これだけ様々な困難がありながらも、映画祭、マンガコンペ、展覧会、講演会などを「オンライン」や「ハイブリッド」、あるいは従来通りの形で開催し、160 周年を今に相応しい形で祝えることを嬉しく思います。

私の個人的な考えでは、両国の国家同士、国民同士の友情と心の絆をもっとも美しく表しているのが芸術の世界だと思います。中でも特に音楽です。それ故、素晴らしい記念コンサートが開催されることを嬉しく思います。私は日本におけるドイツ音楽の受容と解釈に深い感銘を覚えています。その深さと強さは世界で類を見ません。富田一樹氏は本日、卓越した演奏で私たちにその一端を見せてくださることでしょう。

また、記念コンサートにヨハン・セバスチャン・バッハの作品を選んで下さったことにも感謝します。彼の創作の全てに反映されている福音書の精神はドイツ人コミュニティーの生活の礎であり、今後も常にそうあり続けることでしょう。皆様に満ち足りた午後と神の祝福をお祈り申し上げます。

オルガン リサイタルの紹介

この度は神戸ユニオン教会 150 周年、日独交流 160 周年、誠におめでとうございます。このような記念すべき機会に貴教会のオルガンを演奏させて頂きます事、心より感謝申し上げます。本日の公演は、敬虔なプロテスタント信者であると同時に優れたオルガニストでもあった J.S.バッハの作品を多く取り上げるプログラムをご用意しております。またバッハ以外に、ポツシュ社製オルガンが奏でる深みあるパイプの響きに合わせ、歌心を感じさせるブラームスやモーツァルト、パッヘルベルの宗教作品、「日独交流」を記念して日本の童謡を編曲した作品、中世の時代に書かれた珍しい音楽もご紹介

介します。多彩な音色や様々な音楽の表情を是非最後までお楽しみ頂けましたら幸いです。

中部ドイツで活躍した J.S.バッハ(1685-1750)は音楽一家の下に生まれ、幼い頃から音楽へ情熱を抱きつつ、様々な音楽様式を吸収して育ちました。オルガニストとしての名声も高かったため、オルガン作品も多く残しています。「前奏曲とフーガホ短調」は若い頃の作品で、「前奏曲」では巧みな即興演奏、後半の「フーガ」ではリズムカルな音楽が描かれ、ここから更に発展していくバッハの才能の片鱗を見ることが出来ます。バッハはプロテスタントコラールを用いた宗教作品も多く手掛けました。とりわけ上品な美しさを持つ「おお愛する魂よ、汝を飾れ」は、人が罪の重さに潰れないよう、優しく励ますようなコラール作品です。「我らの救い主なるイエス・キリスト」ではバッハが最も得意とした「フーガ」の形式を使い、複雑で芸術性の高いポリフォニー音楽を見事に作り上げています。

J.パッヘルベル (1653-1706) はオルガニスト、作曲家としてオーストリアや南ドイツで活躍しました。バッハ家とも親交があったと伝えられています。「神の御業は全て良し」は神の行いに対する絶対的な信頼を説く内容で、表情豊かな 9 つのコラール変奏を持つ作品です。包み込むような繊細な響きが人気の「アヴェ・ヴェルム・コルプス」は W.A.モーツァルト(1756-1791) が晩年に作曲した名曲として知られます。原曲では合唱と弦楽、そこにオルガンが加わるという、古典派時代の作品でありながらバロック音楽を意識した古風な編成です。「我が心の切なる願い」はドイツロマン派を代表する作曲家 J.ブラームス(1833-1897)によるコラール前奏曲です。短い作品ではありますが、その中に複雑なハーモニーと半音階的な旋律の動きによって「救いとしての死」を求めます。

作者不詳で残された謎の多き中世時代(14 世紀頃)の作品「エスタンピー・レトロヴェ」は、世界に現存する楽譜の中でも最も古い鍵盤楽曲として知られています。「エスタンピー」とは古い舞曲を起源としていて、この作品も軽やかで風変わりなステップが特徴的です。中山晋平(1887-1952)は長野県に生まれた日本を代表する作曲家で、誰もが口ずさむことのできる流行歌を数多く世に送り出しました。今回はその中でも特に親しまれている童謡「シャボン玉」の旋律を使い、近代風にアレンジされた小品としてお聴き頂きます。

「いと高きところには神にのみ栄光あれ」はラテン語典礼文における「グローリア」に相当します。この作品では軽快で小さなフーガの中にコラールが現れるトリオという、ユニークな作風による音楽が見られます。最後にお届けする「トッカータとフーガニ短調」は誰もが知るオルガン音楽の代表的傑作です。自由に駆け巡る旋律やショッキングなハーモニーを伴う「トッカータ」、ジグザグとした旋律同士が複雑に絡み合う「フーガ」の後、再び自由で即興的な「コーダ」で壮大に締めくくられます。パイプから発せられる重厚な音色と響きは、きっと当時の人を驚かせた事でしょう。